

竹内街道全エリア 観光ガイド



Shibagaki jinjya
柴籬神社 松原市

第18代反正天皇を主祭神とし、仁賢天皇の命により5世紀後半に創建されたと伝わる。長尾街道と竹内街道の間、ほぼ中央に位置している。反正天皇は歯並びが綺麗だったことから別名、多遲比瑞齒別尊(たじひのみずはわけのみこと)とも呼ばれている。写真は境内末社の歯神社(はがみしゃ)。



Yachuji
野中寺 羽曳野市

聖徳太子と蘇我馬子の創建と伝えられ、竹内街道に面して南大門をおく大寺院だった。叡福寺が「上の太子」、大聖勝軍寺が「下の太子」と呼ばれているのに対し「中の太子」と呼ばれている。境内には塔跡や金堂跡などの飛鳥時代の伽藍の一部が残っており、国指定の史跡になっている。



Eifukuji
叡福寺 太子町

聖徳太子とその母・穴穂部間人皇后、妃・膳郎女の墓所を守るために聖武天皇により建立されたとされる寺院で「上の太子」と呼ばれている。織田信長の兵火で焼失したが、江戸時代に豊臣秀頼により再建された。周辺には古代の天皇陵が数多くあり、竹内街道を含めた歴史散歩コースとして人気がある。



Nagao jinjya
長尾神社 葛城市

竹内街道の最東端にある神社。御祭神は天照大神と豊受大神、及び水光姫命と白雲別命が祀られている。古代においては、大阪から竹内街道を通して大和へ入り、藤原京に至る大道「横大路」の西側の入口となる重要な場所であり、そして現代も主要な道が交差することから、産業の神であり交通安全の神としても信仰されている。



Nintokutenouryo
仁徳天皇陵 堺市 (写真提供:堺市)

全長約486mと日本一の大きさを誇る前方後円墳。この古墳を含む百舌鳥(もず)古墳群は、世界文化遺産登録を目指している。竹内街道沿いには他にも孝徳天皇陵、推古天皇陵など古墳が数多く点在し、竹内街道が「葬送の道」として重要な役割を担っていたことがうかがえる。

竹内街道

1400年記念

竹内街道

記録と記憶を巡る



お問い合わせ

葛城市商工観光課
〒639-2197 奈良県葛城市長尾85番地
Tel. 0745-48-2811
午前8:30~午後5:15
(祝日、休日、12月29日から1月3日を除く月曜日から金曜日)

葛城市相撲館「けはや座」
〒639-0276 奈良県葛城市當麻83番地1
Tel. 0745-48-4611
午前10:00~午後5:00
(毎週火・水曜日、12月28日から1月4日を除く)
※火・水曜日が祝日の場合は閉館
※開庁時間が異なる組織、施設がありますのでご注意ください。

交通アクセス

- 大阪から [近鉄] 大阪阿部野橋(南大阪線)~磐城/38分
- 奈良から [近鉄] 近鉄奈良(奈良線)~大和西大寺(橿原線)~橿原神宮前(南大阪線)~磐城/1時間7分
- 京都から [近鉄] 京都(京都線特急)~橿原神宮前(南大阪線)~磐城/1時間24分
- 自動車にて(高速道) 羽曳野IC(南阪奈道路)~葛城IC(南阪奈道路)/15分



難波より 京に至る 大道を置く

（日本書紀 推古天皇二十年の条）



竹内街道を歩く



竹内街道とは…

日本書紀 推古天皇21(613)年の条に記された官道は、難波と飛鳥を結ぶ重要な道として推古天皇により敷設されました。大阪府堺市と奈良県葛城市を結ぶ約26キロの竹内街道とルートが重なることから、竹内街道が日本最古の官道といわれています。道はさらに東へ延び、横大路と名を変えて飛鳥に続いています。1400年の長い歴史の中で、様々な人や物・文化がこの道を行き交いました。作家・司馬遼太郎は幼少期を過ごしたこの地について、著書『街道をゆく』で、「古代のシルク・ロードともいうべき道」と綴っています。

年表

旧石器時代	二上山で産出されたサヌカイトが竹内峠を越えて各地に運ばれる
弥生時代	大陸から伝わった稲作文化が峠を越えて奈良盆地へもたらされる
3世紀頃	二上山から切り出された石が箸墓古墳に用いられる
5世紀頃	日本書紀の「履中天皇即位前紀」に「当麻径」の記述が登場
590年	敏達天皇の葬送行列が竹内峠を越えて河内へ向かう
593年	用明天皇改葬行列が河内の磯長谷へ向かう
613年	「難波より京に至る大道を置く」
622年	聖徳太子が磯長陵に葬られる
628年	推古天皇が磯長山田陵に埋葬される
672年	壬申の乱
686年	大津皇子謀反事件 二上山雄岳山頂に葬られているとされる
763年	中野姫が當麻寺へ入寺する
1307年	竹内峠西方に鷲の関がつくられる
南北朝時代	楠木正成が二上山城を築く
1348年	北朝方の兵が竹内峠を越えて吉野へ至る
1614年	大坂冬の陣 新庄桑山氏が竹内街道を通って大坂を目指す
1684年	松尾芭蕉が「野ざらし紀行」で竹内に滞在
1688年	松尾芭蕉が竹内を訪れ、孝女伊麻に会う
1853年	吉田松陰が竹内峠を越えて大和を訪れる
1863年	天誅組騒動 中山忠光ら天誅組が竹内峠を越えて大坂へ逃れる
1877年	竹内峠の道路の改良が始まる
1939年	折口信夫が「死者の書」を「日本評論」に発表
1975年	竹内街道が県道から国道166号に昇格

大阪と奈良の間にそびえたつ葛城山系をいかに越えるか。海外からの物資や文化が上陸する難波の港から大和へ。物資を運ぶ人、戦乱から逃れる人、多くの人が竹内峠を行き交い、数々の歴史の舞台となってきた。古くは一上山で産出されるサヌカイトを運ぶ道として用いられ、五世紀には履中天皇が太子時代、戦から逃れて大和へ入ろうとする際に当麻径（竹内街道と推定）を通ったことが、日本書紀に記されている。壬申の乱にも使われ、戦国時代には大坂冬の陣へ向かう新庄・桑山藩が峠を越え、幕末の天誅組騒動でも争乱の最中に峠を越えて大坂へ逃れた。今とは異なり、険しい山中の峠道。峠は明治、大正期に多くの人の力で開削され、今の姿となった。



～古代より続く道～

竹内峠～春日若宮神社

竹内峠付近 鶯の関址文学碑ほか

外交の道

飛鳥時代には、大陸文化を携えた唐や隋からの使節がここを通過して飛鳥京に向かったと考えられている。遣唐使や遣隋使もこの峠を越えたのではないかと。近くの三ツ塚古墳群から唐とのかかわりを示す革袋が見つかり、竹内周辺に海外交流に重要な役割を果たした人物が存在したと考えられている。



三ツ塚古墳群出土の革袋
古墳の近くに埋葬された人物の副葬品
唐の役人の衣服に関する規定に記された「鞆囊(はんのう)」の可能性が高い



三ツ塚古墳群
竹内街道と、大阪府河南町に至る平石峠への道の合流地点にある古墳群
15基以上の古墳があり、古墳築造のピークは7世紀前半で「大道」の設置時期と重なる

葬送の道

飛鳥で没した天皇は葛城山系を越えて河内の磯長(しなが)谷に葬られた。大阪府太子町には推古天皇陵や聖徳太子の御廟のある叡福寺、孝徳天皇陵などがあり、竹内街道はこうした天皇や関係者の葬送の道としても使われた。



聖徳太子御廟
(大阪府太子町)



推古天皇陵(大阪府太子町)

石の道

二上山は石器の材料となるサヌカイトが産出されることから、古来より石を運ぶ道として利用された。高松塚古墳の石室に用いられた石は、二上山のふもとから産出され、竹内街道を通過して飛鳥に運ばれたと考えられている。



古代の石切り場
(大阪府太子町)
高松塚古墳
(奈良県明日香村)
の石室の石を切り出したとされる



竹内遺跡出土の石器
サヌカイトの産地である二上山が近く、昔は田畑でも石器が見つかった

我おもふ
こころもつぎさ
行く春を
越さでもとめよ
鶯の関

康資王母



平安時代の歌人で、康資王(やすすけおう)の母が詠んだ歌。随筆集「明玉集」に収められている。峠には、この和歌を司馬遼太郎が揮毫した「鶯の関址文学碑」が国道改修を機に建てられた

當麻寺

聖徳太子の異母弟である麻呂子王が建立した「万法蔵院」を始まりとする。役行者の修行の地でもあり、後には藤原豊成の娘、中将姫が入寺し、當麻曼荼羅を織りあげたとされる。室町時代以降は浄土信仰の中心的存在となる。当初は竹内街道に面して南側を正面に建てたと考えられるが、南門があったかどうかは今も謎。



悲劇の皇子大津皇子

うつそみの人なる我や
明日よりは 二上山を弟世(いろせ)と我が見む
(万葉集巻2.165 大津皇子)



大津皇子句碑

大津皇子は父親の天武天皇が亡くなったあと、謀反の疑いをかけられて処刑される。皇太子であった草壁皇子の地位を脅かす存在として仕組まれたともいわれる。伊勢神宮の斎宮を務めていた姉の大伯皇女は、二上山に葬られたとされる大津皇子を思い、「明日からは二上山を我が弟と思う」と歌に詠んだ。



大津皇子二上山墓(雄岳山頂)



二上山
万葉集や様々な文学の題材にもなった雄岳山頂には謀反の疑いで処刑された大津皇子の墓がある



上池
司馬遼太郎の『街道をゆく』に登場



春日若宮神社

當麻寺

春日若宮神社

道標

上池

道標

三ツ塚古墳群

平石峠と竹内峠への道標

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

池原邸(旧旅館柳屋)

小説を旅する

数々の文学のテーマになった竹内街道

竹内街道は、様々な文学のテーマにもなった。「した した した、耳に伝ふやうに来るのは水の垂れる音か。ただ凍りつくやうな暗闇の中で、おのづと膝と膝とが離れてくる…」折口信夫の「死者の書」は、二上山の山頂に葬られた大津皇子と、當麻寺の中將姫がモデルとされ、闇の中で再生した男女の死者が語り合う形で物語は進む。

五木寛之も『風の王国』で葛城山系の山岳修行者を主要なテーマとし、男女の悲恋を描いた辻邦生の『風越峠にて』も二上山に眠る大津皇子とその姉の大伯皇女を彷彿させる。悲劇の皇子、大津皇子の物語や、数多くの天皇が二上山を越えて葬られたことが作家のイマジネーションをかきたてるのか。



『死者の書』(岩波文庫)



『風の王国』(新潮社)

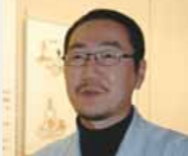
Takenouchi COLUMN

竹内街道、横大路、それは文化交流の道であり、統治の道であり、意外にも内乱の道でした。前のふたつはよく知られていますが、内乱の道は、壬申の乱の時に天武側が、横大路から、伊賀、伊勢につながる道路を利用して兵を運び、勝利を得ました。伊勢には、皇太子の所領がありました。この道は、藤原京の頃から古東海道となり、東海・東国との最重要の交通路でした。まさに東日本と西日本を結ぶ道でした。



奈良県立橿原考古学研究所
所長
菅谷文則氏

三ツ塚古墳群に革袋が埋葬された7世紀末は、竹内街道が大陸との交流において重要な役割を果たした時期に重なります。被葬者は竹内街道を管理したこの地域の支配者層に属すとともに、海外交流を担った人物と考えられます。竹内街道は大陸からの文物を受け入れる大和の玄関口であり、この地域に住む人たちは胸の内に海外への憧れを醸成しつつ、先進文化を受け入れる気風があったのではないのでしょうか。



葛城市歴史博物館
学芸員
神庭 滋氏

元禄文化を代表する俳人松尾芭蕉は『野ざらし紀行』の旅の途中、竹内を訪れこの句を詠んだ。竹内には芭蕉の門人の千里(ちり)の実家があり、立ち寄ったという。芭蕉はその後、何度も竹内を訪れ、親孝行で名高い伊麻にも会った。芭蕉が大和で最も足を多く運んだのが、この竹内だといわれている。村の庄屋、油屋喜右衛門の庵「興善庵」に滞在し、その庄屋のもてなしに感激した芭蕉が、この句を贈ったとされている。

綿弓や 琵琶になぐさむ 竹の奥



天理大学附属天理図書館提供



松尾芭蕉の足跡をたどる 春日若宮神社～綿弓塚

綿弓塚の休憩所

松尾芭蕉と竹内街道

松尾芭蕉が初めて竹内へ訪れたのは『野ざらし紀行』の旅の貞享元年(1684年)9月中旬である。竹内出身の門人・千里が伴をし、竹内を案内した。千里は江戸に滞在していた折に芭蕉の弟子となり、通称粕屋甚四郎、日損庵千里と号した。芭蕉は竹内滞在中、当時の村の庄屋油屋喜右衛門と親しくなり、長い俳文に「綿弓や 琵琶になぐさむ 竹の奥」の句を書いて贈っている。その後もよほどこの竹内が気に入ったのか、何度も足を運び、油屋喜右衛門の庵である興善庵に逗留したとされる。文化6年(1809年)、高田(大和高田市)の俳人が、芭蕉が竹内で詠んだ句を記念し、千里が晩年に結んだ日損庵に綿弓塚碑を建てた。その碑を法善寺に移し、大正13年に興善庵跡、平成4年に民家を利用した休憩所もある現在の場所に移転をした。毎年11月の第2日曜日、綿弓塚の休憩所で芭蕉と千里をしのぶ芭蕉忌法要が営まれる。



芭蕉忌法要の様子



綿弓塚の碑
「綿弓や 琵琶になぐさむ 竹の奥」の句を刻んだ碑



葛城市観光ボランティアガイドの会長 松下和美さん

澄んだ空気や水、1400年の長い歴史、風情のある街並みなど、竹内街道には素晴らしい所がたくさんあります。司馬遼太郎さんが竹内の峠からみた風景を「大和の原風景」とおっしゃっていますが、どこか懐かしい雰囲気があります。竹内街道にはあると思います。「大和の原風景」という言葉は、観光ガイドをさせていただいたお客様からも聞きました。松尾芭蕉も何度か竹内を訪れていますが、このほっとする雰囲気を感じていたらではないでしょうか。



法善寺

山門脇に郡山藩の柳沢里恭の筆による「孝女伊麻旧跡」の石碑がある。最初は孝女伊麻宅の前に建てられたが、後に法善寺に移された。

一楽古墳

一楽古墳は、「一楽」と称される丘陵を利用した前方後円墳で、昭和13年に形象埴輪が出土したことで注目された。昭和の初めごろには土器や埴輪が見つかり、地元の人たちが拾っていたという。それらを伊瀬幸太郎・伊瀬敏郎(奈良文化高等学校創業者)父子が収集し、今に伝えている。



一楽古墳から出土した四獣鏡(奈良文化高等学校所有)

西光院

寛文2年(1662年)創建。観音堂にある十一面観音は身粉(みそぎ)観音と呼ばれている。近江から竹内峠を通り霊木を初瀬へ運ぶ途中、竹内街道が狭くて通ることができず、霊木の端の部分を切り落としなんとか運ぶことができた。その端の部分を粉いで造らせたのが身粉観音である。



西光院



十一面観音像(別名・身粉観音)

今市物語と孝女伊麻

今市に生まれた伊麻と弟の姉弟は幼いころに生母に先立たれ、継母に酷い仕打ちを受けました。伊麻と弟は大坂などで奉公をしたあと、伊麻は竹内にある千里の実家の粕屋で働き、弟は今市で桶屋を始めました。父親は大坂で暮らしていましたが、継母が家を出ていったため、父親を迎えに行き、姉弟で父親に尽くしました。父親が流行病にかかった際に、病気が良くなるというウナギを探し回りましたが、簡単には見つかりません。しかし、夜遅くに台所で水音がするので水瓶の中を見ると、大きなウナギがはねていました。父親はウナギを食べるとたちまち元気になりました。伊麻の噂を聞いた郡山藩主・本多政勝が大変感動し、たくさんのお金を与えたいといひます。伊麻の功績は「今市物語」として語り継がれ、絵巻にもなっています。



今市物語絵巻



今市物語絵巻を所有する松井和男さん

絵巻が伝わった経緯はわかりませんが、伊麻さんが竹内に住んでいたころのお話なのでとても身近に感じられます。伊麻さんの物語とともに、後の時代に大切に伝えていきたいと思ひます。水瓶にウナギとは意外ですが、竹内には昔から豊かな湧水が流れていてウナギもいたそうです。病に効くものとして馴染みがあったのでしょね。

物語を旅する

Takenouchi COLUMN

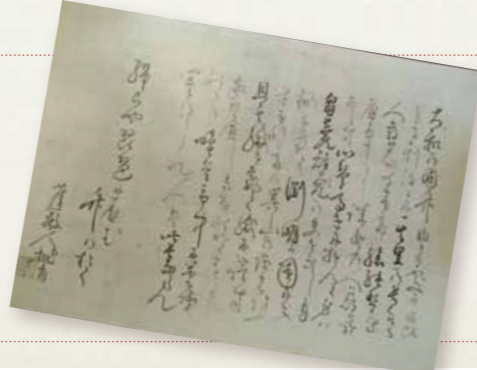
街道に残る松尾芭蕉の記録と記憶

松尾芭蕉が油屋喜右衛門に書き送った綿弓の句は、今も葛城市内に伝えられています。所有する筒井一成さんは旧竹内村の出身で、祖父は村長をしていたといひます。芭蕉の筆を見るために訪ねてきた人たちの芳名録も併せて伝えられており、地元の宝として大切に守っています。

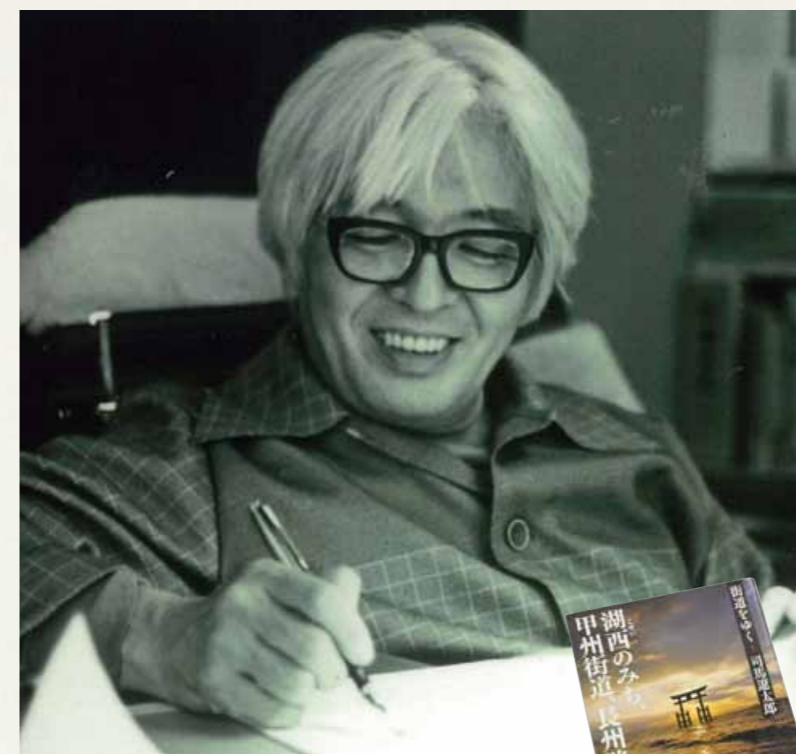


所有する芭蕉の真蹟掛軸を広げる筒井一成さん

芭蕉が竹内滞在中に書いた綿弓の句の書



街道に残る司馬遼太郎の記憶



写真提供 司馬遼太郎記念館

司馬遼太郎
歴史小説家。『竜馬がゆく』『坂の上の雲』『翔ぶが如く』など代表作は多数。司馬遼太郎は幼少期を母方の実家がある竹内で過ごし、竹内について『街道をゆく』で思い出を綴っているほか、『涙腺に痛みをおぼえるほどに懐かしい』（『芸術新潮』1976年11月号）とも著している

大和国北葛城郡竹内^{たけのうち}というのが、竹内峠の大和側の山麓にある。車はそこをめぐらしているのだが、私事をいうと、私は幼年期や少年期には、その竹内村の河村家という家で印象的にはずつと暮らしていたような気がする。そこが母親の実家だったからだが、母親が脚気であったためその隣り村の今市という村の仲川という家で乳をのませてもらっていたから、竹内峠の山麓はいわば故郷のようなものである。村のなかを、車一台がやつと通れるほどの道が坂をなして走っていて、いまでもその道は長尾という山麓の村から竹内村までは路幅も変わらず、依然として無舗装であり、路相はおそらく太古以来変わっていない。それが、竹内街道であり、もし文化庁にその気があって道路をも文化財指定の対象にするなら、長尾―竹内間のほんの数丁の間は日本で唯一の国宝に指定されるべき道であろう。

「街道をゆく1」（朝日文庫）より

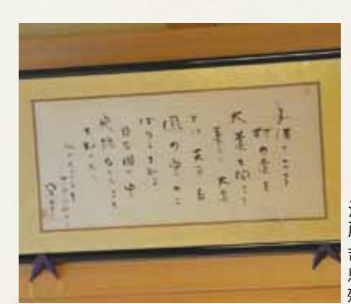
幼いころ、司馬遼太郎とよく遊んだ津田武雄さん

司馬さんは夏休みになると竹内に来ていたので、子どものころにはよく一緒に遊びました。山へ薪を拾いに行き、一緒に風呂に入ったことも良い思い出です。『街道をゆく』に書いているように、田んぼで矢じり拾いをしたこともあります。司馬さんは「矢じりを作ってみよう」と言って、見よう見真似で作りました。その探究心はさすがだと思います。



司馬遼太郎は3歳まで、南今市の仲川家で育った。仲川家には4人の子どもがおり、特に仲が良かった千代造とはその後も交流が続いた。千代造が亡くなった折に書き送ったという色紙には「仏前で古き写真を 彼岸入り」と記されている。仲川賀津子さん（南今市）が所有する司馬遼太郎の色紙

司馬遼太郎の従弟 河村博三さん



河村博三さん
所有の額
司馬遼太郎が幼いころの思い出を綴った色紙などが残されている

司馬さんが産経新聞の京都支局に勤務していたころ、法事のあとで親戚たちを京都の社寺に案内してくれたのを覚えています。子どものころに過ごしたという我が家はとても古い木造家屋でしたが、自分が生きている間は絶対に建て替えてくれるなど言っていました。竹内での思い出をとても大切に感じていたのでしょう。司馬さんが亡くなってから、新しい家に建て替えました。

歴史を旅する

司馬遼太郎と竹内街道

司馬遼太郎は、子どものころ、竹内でよく遊びました。このあたりの田んぼで、矢尻やナイフのような使い方をした古代の石器のかけらを拾ったと言います。サヌカイトという香川県とこのあたりで見つかる讃岐岩です。子ども時代が後の作家像にどう影響したかはわかりませんが、でも、古代への関心など好奇心を押し上げたことは十分考えられることだと思います。

竹内街道の峠から見た風景が原風景だ、とも言っています。大阪に住んでいたからこそ強く印象に残ったのでしょう。そのうえで西の方向をながめながら難波の津からはるか長安を連想したのではないのでしょうか。



司馬遼太郎記念館 館長 上村洋行 氏



司馬遼太郎の原風景

綿弓塚～長尾神社

長尾神社 一の鳥居

孝女伊麻をめぐる旅



孝女伊麻旧跡 近くに伊麻の家があった



磐城小学校の校章 孝女伊麻の水瓶をモチーフにしている



孝女伊麻追善法要 磐城小学校の児童らが参列する



磐城小学校校舎入口にある伊麻像



大峰山上夜燈 江戸時代、大峰詣をする人たちが街道を行き交った名残がみられる

竹内遺跡 ●

大峰山上夜燈 ●

綿弓塚 ●

旧旅館菊屋所在地 ●

鍋塚古墳 ●

現徳寺 室町時代に蓮如上人が立ち寄った際に、松の木を台木に柿の木を接いだいわれる松柿(奈良県保護樹木)があるこの実を食べると中風にならないといわれている

長尾の道標 竹内街道と長尾街道が交わる地点にある 右/よしのつば坂かうや 左/はせいせ道と記されている

長尾の道標 長尾街道との交差点

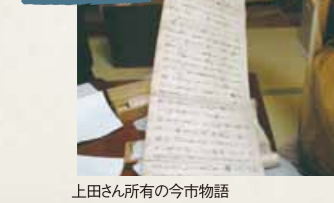
長尾神社 卍

● 磐城小学校

● 孝女伊麻旧跡

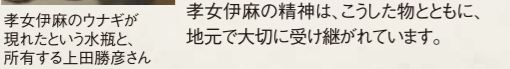
● 現徳寺 卍

Takenouchi COLUMN



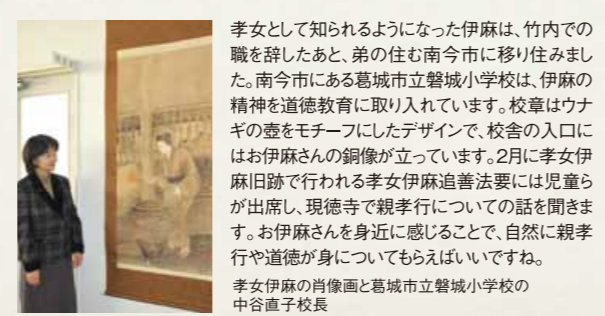
上田さん所有の今市物語

南今市の上田勝彦さん宅には、孝女伊麻がウナギを見つけたという水瓶が伝わっています。江戸時代に医者をしていた先祖が、伊麻さんから父親の治療をしたお礼にと譲り受けたといわれています。「小学生のころに祖父から水瓶を見せられ、伊麻さんの話を聞いた。次の世代にも語り継いでいきたい」と上田さん。上田さん宅には、今市物語を記した文書も残されています。孝女伊麻の精神は、こうした物とともに、地元で大切に受け継がれています。



孝女伊麻のウナギが現れたという水瓶と、所有する上田勝彦さん

孝女として知られるようになった伊麻は、竹内での職を辞したあと、弟の住む南今市に移り住みました。南今市にある葛城市立磐城小学校は、伊麻の精神を道徳教育に取り入れています。校章はウナギの壺をモチーフにしたデザインで、校舎の入口にはお伊麻さんの銅像が立っています。2月に孝女伊麻旧跡で行われる孝女伊麻追善法要には児童らが出席し、現徳寺で親孝行についての話を聞きます。お伊麻さんを身近に感じること、自然に親孝行や道徳が身につくのも素晴らしいですね。孝女伊麻の肖像画と葛城市立磐城小学校の中谷直子校長



孝女伊麻の肖像画と葛城市立磐城小学校の中谷直子校長



1.池原邸(旧旅館柳屋・非公開) 2.きらびやかな襖絵が格式の高さを感じさせる 3.当時のまま残る客室 4.趣を感じさせる客室の外廊下 5.書画があらわられた衝立

吉野建てという構造で、正面からの1階が、裏側からは2階になっている

Takenouchi-kaido

竹内街道

宿場町の名残を伝える 池原邸(旧旅館柳屋-非公開)

柳屋の記録

竹内街道には江戸時代、伊勢参りや大峯山上詣に向かう人たちの宿があった。池原照幸さん宅もその一つで、「柳屋」という格式の高い宿だったという。「大阪から伊勢参りをするには竹内で泊まり、次に初瀬で泊まってというのがちょうどよい距離だったようですね」と池原さん。築300年ともいわれる建物の2階座敷は、旅館を営んでいた当時のまま残されており、きらびやかな襖絵や精緻な欄間などは当時をしのばせる。国道改修で庭の一部が削られたが、昔は水を貯蔵する水室があったという。

江戸末期の竹内街道の街並み

縮弓塚の休憩所の中に、江戸末期ごろの竹内街道の街並みを再現した地図が掲示されている。この地図は「竹内自然を愛する会」文化班が古くから聞き取り調査を行い、それを基に作成したもので、鍛冶屋や饅頭屋、酒屋など当時の屋号が記されている。同休憩所も、元は造り酒屋の建物だった。こうした屋号は昭和初期まで各家の呼び名として伝わっていたという。



竹内在住 和田穂代さん

2013年が竹内街道敷設1400年ということは、学校で教えてもらいました。子どもの頃から通っている道なので、歴史ある街道という実感はないですが、松尾芭蕉や孝女伊麻は小学校の時から知っていました。自然が多くほっとできる場所なので今の姿をずっと残してもらいたいです。私自身も一時的に竹内を離れてもまた戻ってきたいと思っています。



竹内自然を愛する会 文化班 阿古敬子さん

10年ほど前から「竹内自然を愛する会」文化班に所属し、葛城市竹内街道の歴史などについて調べ始めました。縮弓塚で寸劇「竹内街道物語」に推古天皇役として出演したことも、良い経験になりました。1400年前に日本最古の官道として作られたこの道は、歴史的価値と文化のあるすごい所なんだと再認識しました。これからは、自分の子どもや孫の世代へ竹内街道の歴史を伝えていければと思います。



西光院住職 中村法秀さん

かつて竹内街道は「信仰の道」としても多く利用され、竹内は宿場町として栄えました。商いを支えられた地元の人々による「旅人たちに信仰で恩を返したい」という感謝の想いがこの寺院の原型になっているのだと思います。疲れた精神を癒しほっと安心できる、心の拠り所でありたい。古き良きコミュニティが消えつつある今だからこそ、そして未来においてもそんな場所であり続けたいと感じております。



竹内区長 仲田正徳さん

歴史の趣を感じさせる竹内の家並みを残したいと、3階建て以上の建物は建てないなどの申し合わせを自治会でを行っています。住んでいる人の事情もありますが、子どものころのイメージ、風情は残るようにしたいですね。ほかにも、古い資料を収集し、記録として残すことはできるのではと考えて取り組んでいます。ササユリが咲き、ワラビやゼンマイのある豊かな里山を取り戻したいですね。



長尾区長 大村隆彦さん

長尾区長として2年間、長尾神社での祭りなどを中心に1400年記念事業も盛り上げてきました。竹内街道や竹内峠は、先人たちがこれまでも大切に守り続けてきた由緒ある所です。新しい名所を作るよりも、旧街道や史跡など今あるものを活かしてほしいです。長尾は、若獅子会など頼もしい若い世代がいます。彼らや、葛城市の地域住民一丸となって、長尾神社や竹内街道を守り続けていきたいと思っています。



長尾神社宮司 吉川雅章さん

「わが社より 出で街道 最古なる 第一官道とは 想像難き」神社の禰宜でもある母が詠んだ歌です。竹内街道は、古代より遣隋使や遣唐使、それに大阪と大和を行き来する商人、伊勢参りの人たちが賑わいました。その大和の入口にあるのが長尾神社で、道祖神としての役割を果たしてきました。この道は、これから100年後も、今までの1400年と同様「集まり散りて人は変われど」誰をも拒まず、変わることもなく黙々とその役割を果たしていくことですよ。

竹内街道 1400年記念事業レポート

8月11日 竹内街道 灯火会

竹内街道で結ばれた市町村が参加する光のイベント「竹内街道灯火会」。縮弓塚から長尾神社までの約1kmの街道が地元の住民が並べたろうそくの幻想的な灯りで彩られた。芸商人(げいあきんど)やお囃子隊も街道を練り歩き、歴史ある街道の賑わいが再現された。

●場所:長尾神社/當麻スポーツセンター/縮弓塚

11月3日 ノルディックで 歩く街道 いまむかし (体験ノルディック)

2本のポールを使って歩くことにより、足腰の負担を軽減しつつ、ふつうに歩くよりもカロリーを消費するため健康によいとされているノルディック・ウォーク。このイベントに、150名が参加。歴史に触れながら、大和高田市から葛城市までの約5kmの竹内街道沿いのウォーキングを楽しんだ。

●場所:大中公園(大和高田市)から葛城市相撲館「けはや座」まで

11月9日 竹内街道・横大路(大道) 1400年記念 小学生相撲大会

相撲発祥の地と言われる本市において、これからの街道を担う子ども達の交流の場として、沿線市町村の小学生が参加。団体戦・個人トーナメント戦が行われ、元気で熱い戦いを繰り広げ、相撲を楽しんだ。

●場所:相撲館「けはや座」

11月17日 竹内街道・横大路 ~難波から飛鳥へ 日本最古の官道「大道」~ 1400年祭

12自治体が参加した、100年後の1500年へ向けてのキックオフイベント。竹内街道への思いや取り組みをつなぐの祭りでは、街道にまつわるシンポジウム、有名人を招いてのパネルディスカッション、大道燈火会、道沿うまいもん市などが開催され、約1万人の来場者で賑わった。

●場所:大阪歴史博物館/NHK 大阪放送局/難波宮跡公園

12月23日 記録と記憶の シンポジウム

司馬遼太郎記念館館長・上村洋行氏による基調講演では、司馬遼太郎が少年時代からどのような視点で事象をとらえ、思考を続けたのかを語っていただいた。パネルディスカッションでは、各界の専門家が様々な時代・角度からの竹内街道への考察を深め、参加者たちは悠々の時間に想いを馳せた。

●場所:葛城市當麻文化会館

2014年2月2日 まちとみちの 寺子屋

竹内街道を舞台に5つの講座が開かれた。五感をフルに活用した「気配教室」、街道の地質と防災を学ぶ「地面から見るとまちとみち」、街道を歩きながら大喜利にチャレンジする「落語で見る江戸期の旅風景」などの魅力的な内容の講座に多くの家族連れなどが集まりそれぞれの竹内街道を楽しんだ。

●場所:葛城市當麻文化会館

memory and history

人々の ~記録と記憶~



星川徳次郎から樋口清之、伊瀬幸太郎・敏郎へ歴史のバトンリレー

現在、奈良文化高等学校には竹内遺跡から出土したと伝えられる土器や埴輪など千点近くが所蔵されている。これらは、学校法人奈良学園の創立者である伊瀬敏郎氏が長年にわたり郷里竹内で収取したものである。竹内遺跡は著名な考古学者樋口清之氏が地元への郷土考古学者星川徳次郎氏の助力を得て刊行した『大和竹内石器時代遺蹟』によって、その重要性を認められた。伊瀬敏郎氏および父親である幸太郎氏はその意志を引き継ぎ、星川氏から譲り受けたとされる歴史資料を長年にわたり保管してきた。そして、これからもその歴史は引き継がれていく。



樋口清之著「大和竹内石器時代遺蹟」に掲載された出土物(奈良文化高等学校提供)